

この度、新たに制作された顕彰能「青淵」の上演に先駆けて、日本社会近代化の先駆者とも言われる渋沢栄一について、歴史学者で渋沢栄一記念財団理事長の樺山紘一氏、日本商工会議所名誉会頭の三村明夫氏、能楽師、二十六世観世宗家の観世清和氏のお三方に加え、東京商工会議所北支部会長の越野充博氏を進行役に、歴史、経済、能楽の各分野からお話を伺った。

■産業人を育んだ「ふるさと」深谷

越野…渋沢栄一の言葉を集めたものに「論語と算盤」というものがあります。論語はまさに倫理、そして算盤は経済ということ。倫理観を持った経済運営という、合本主義ということを唱えたわけですが、同時に、公共という概念を近代的に取り入れた方でもあります。日本社会近代化の先駆者、というふうにも言われるわけです。ということで、歴史家のお立場から、そして経済界からのお立場から、さらにはこの今回新作能を取り上げられた能楽のお立場から、渋沢栄一という方を軸にして、いろいろな話を伺ってみたいと思います。

まずは歴史家のお立場から、樺山先生、お話を伺えますか。

樺山…渋沢栄一は、現在の埼玉県深谷というところに生まれました。深谷がどこかというと、江戸時代、深谷を始め



関東平野は、ほとんどがお米が穫れない場所でした。当時はお米が何石作れるかということで大名の格が決まるほど、お米に依存した経済だったのに、深谷周辺ではお米をほとんど作らず、従って、それをお金に換えて富を作るといふ事ができませんでした。そこで、養蚕などお金に換える事ができる農業がさかんに行われていました。渋沢の家は、着物などを染める藍染に使われる染料、「藍玉」と言いますが、これを商っていました。

当時、恐らく渋沢だけではなくあの周辺から、このお米ができない農村で頑張っていく、そういう人たちが幾人も現れてまいりました。渋沢は、お米はできないけれども、その代わり藍玉を、あるいは養蚕からできる絹糸を商売としながら、やがてそれを通して、実はもっと大きな商売というものが、大きく言えば日本社会を変えることができるような商売を創るつと、そう考えたに相違ない、そういう大変珍しいところから生まれてきたということが、渋沢の本質だったように思えてなりません。

越野…そうですね、既存の枠組みから離れて、しっかりとビジネスを創っていくという芽吹きがもう深谷の時代からあった、こういうことなんじゃないかな。

■王子・飛鳥山の想い

越野…次に王子の話に移りたいのですが、三〇代から本拠地として構え、そして最終的には住居にまでされた、王子・飛鳥山。ここを定めたというのは、渋沢にとってもんな思いだったのでしょうか。

樺山…この王子・飛鳥山というのは、かつて八代將軍徳川吉宗が、この土地を、江戸の庶民たちが桜を見に行く場所にしようではないかと言って、桜をたくさん植えました。現在でも飛鳥山は、東京の花見の里として大変知られてますけれども、それは実は、北の深谷ですとか、その他関東地方のいろいろな町から富が集まってくる、そういう場所の二つになったわけですね。そこに、渋沢栄一も目を付けてましたし、その他多くの人々が、そこに何かの産業を興そうではないかと考え、後の王子製紙という名前でも知られているような製紙工場ですとか、タバコですとか、そういったいろいろな産業を現在の北区、王子・飛鳥山の土地に作り上げていきました。

渋沢栄一は飛鳥山を大変愛しておりまして、九歳で亡くなるまで、この地で暮らしておりました。渋沢にとっては、生まれたのは深谷だったけれども、長い間、自分が活動していくその本拠地であると考えていた。今私たちはその場所に、渋沢史料館という博物館を持つておりまして、皆さんをお迎えしております。ぜひともお時間ありましたら、私も博物館にもお越しいただきたいと思っております。よろしく願います。